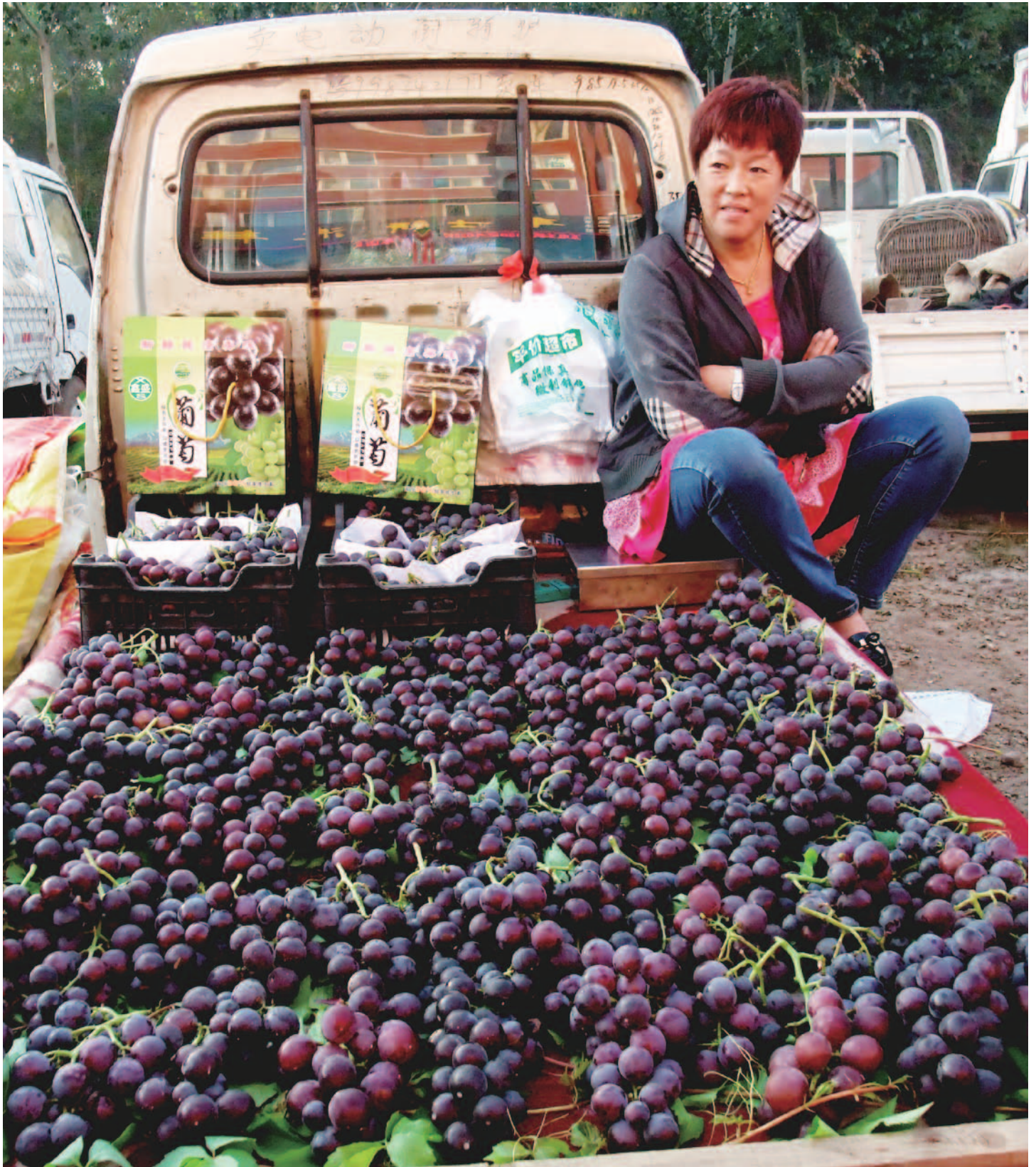




197号
2014 / 10 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



中秋節直前の朝市風景 2014年9月6日 中国瀋陽市沈河区 撮影：崔貞

朝市で葡萄売りのトラック一面に大粒の葡萄がきれいに並べられています。2日後は年に一度の祝日・中秋節。待ち焦がれた収穫の秋に、一家団樂の祝日を迎える準備で、この日の朝市は多数の買物客でにぎわっていました。葡萄売りの女主人もゆとりの表情です。

先日、友人と一緒に北京へ行って、7年ぶりに、昔の住いに近い三虎橋路と呼ばれている路地を歩いてみました。家から3分ほど歩くと、小路の入り口に着きます。昔、この道は、車がやっとすれ違えるくらいの幅しかなく、両方から車が来ると、歩行者は両側の店の中に避難しなければなりません。しかも両側の店がかなり道路にはみ出して営業しているので、場所によっては、どちらかの車がバックして道を譲らないと、何時までも動けないで、車が溜まってしまい大変な渋滞になるような道でした。今ほど車が多くなかった頃は、そんな渋滞も、通りに活気を与える要素の一つでしたが、段々に車が多くなると、道路の整備が本格的に始まりました。それが2007年頃のことでした。

今回行ってみると、小路の入り口で路上に店を広げていた沢山の八百屋さんや果物屋さんがすっかり無くなって、小さな横丁に纏められていました。何軒もあって覇を競っていた美容院は一軒もありませんでした。「浴」と言う看板を掲げたお風呂屋さんは、建物が無くなって、工事用の囲いがしてありましたが、何が出来るのか、例によってお知らせはありませんでした。

この小路は途中、クランクのように、直角に2回曲がっているのですが、其の曲がり角にあった小さなスーパーは、隣の店を2、3軒吸収して、少し大きくなっていました。ずっと昔は、存包処があって、荷物を預けてからでないと中に入れませんでした。2、3年すると、存包処はそのままでも、小さなバッグなどは持ったまま入れるようになりました。それが今では、存包処は跡形も無く、日本にもあるようなセンサーが働くゲートが設置されていました。商品の内容や陳列の方法等は、昔と余り変わっていないのですが、こんな所はかなり進歩していて、さすが北京と思いました。

今回の旅行では前半で上海から南の方へ鉄道で廻ったのですが、其の中で、江西省南昌市の小さなデパートに入る機会がありました。そこには今でも存包処がありました。大きな鍵付きの袋に我々

の荷物を入れて、鍵をかけて預ける方式です。其の袋の鍵がかけ辛いのか、係りの人が不器用なのか、一つかけるのに随分時間がかかりました。其の日は、我々の外にお客が殆どいなかったもので、少し待っても支障はありませんでしたが、もっと混んでいる日には、随分混雑するだろうと心配になりました。

それにしてもこの方式、袋に鍵がついているので、預けた荷物から物が無くなるのを防げると言いたいようですが、我々が鍵を持つわけではないので、鍵なしの大きな袋に入れるだけで充分其の役割は果たすと思います。時間をかけてしっかりと鍵をかけて貰って、自分達で存包処へ預ける手続きを取りながら、やはり此処は、はじめて来た中国の街なののだとの実感が湧いて来ました。

このデパートに、北京では場末とも言える三虎橋路のスーパーのように、出入り口にセンサーが取り付けられるのは何時のことでしょうか？ 随分時間がかかるようにも思えますが、中国では便利なものは瞬間に広がりますから、案外早く、2、3年のうちに導入されるかもしれませんね。

さて、三虎橋路の散歩に戻り、角を2回曲がると、それまでの道よりは少し商店が揃っていました。道路の整備が終わった部分のようですが、ちょっと中途半端な感じがしました。道路は整備され、各商店も前よりは確かに小奇麗になりましたが、見違えるようと言うわけではなく、ただ活気が無くなってしまったのが大きな変化のように感じました。

これは小路の改修のせいばかりではなく、近くにフランス資本の大型スーパー「家樂福(ジャルフ=カルフール)」が出来、車で買物に行く人達が増えたせいでもあるのでしょう。日本の街でも時々見られる現象ですが、連れの人々に、北京の人々の生活に密着した活気有る町並みを見てもらおうとした私の目論見は見事に外れました。

市の中心に林立する高層ビルを眺めて、北京は変わったと思っていましたが、街の変化はこんな身近な所にも押し寄せていたのですね。

何日か前の我が家の出来事ですが、真夜中に妻が目覚まし「今の大きな音は何？」と怖ろしそうな声で言うのが聞こえました。私はそれまで眠っていたので何も音は聞こえなかったのですが、妻の声で目を覚まし、夜中に何事が起きたのかとぞっとしました。強盗でも侵入してきたのかと考えると、急に肌がざわついて、一瞬鳥肌が立ち、まさに身の毛もよだつ思いがしました。

真相は隣の部屋の息子が夜中に壁に止った蚊を手で叩いた音だったのですが…。

ところで、中国語にも“身の毛がよだつ”を意味する成語があります。今回はその成語のエピソードを紹介いたします。

辞書にはそれぞれ次のように載っています。

▲小学館デジタル大辞泉
「身の毛がよだつ 恐怖のために、身の毛が逆立つ。ぞっとする。身の毛立つ」

▲小学館中日辞典：

「不寒而栗 bù hán ér lì 身の毛がよだつ。ぞっとする」

この成語の出自は〈史記・酷吏列伝〉の“是日皆报杀四百余人，其后郡中不寒而栗”（この日四百人余りをことごとく裁き殺した。その後郡内の人々は寒くもないのに震えていた）の部分です。

西漢（前漢）の武帝時代、義縦ぎじゆう^注は長安の県令に命じられました。彼は在任中は法に従って事を処理し、情実に左右されることもなかったので、漢武帝に賞賛されました。

その後彼は河内郡の武官に転任し、更に時を経て南陽太守に昇格しました。

彼は南陽に入ると、元から居た悪徳武官の寧成を即刻処罰しましたので、同じく悪事に手を染めていた富豪の孔氏や暴氏らは驚いて南陽を逃げ出しました。

次に漢武帝は義縦ていじゆうを定襄太守に任命しました。

その当時定襄の治安は大変乱れていました。義縦は定襄に入ると直ちに獄中の200人余りの罪人達と、罪人の知合いや身内の者で密かに獄中に忍び込んで助けてやっている者200人余りを全て逮捕し、合わせて400人以上の者を全て死刑にしました。郡内の人々はそれを聞いて、寒い季節でもないのに全身に鳥肌が立って、身の毛がよだつほどの恐怖を覚えました。

義縦は非常に厳格に法律を執行し、酷薄で情け容赦がなく、例え相手が権勢のある高官であろうと、一向に恐れることはありませんでした。このような義縦の対応を見て、後に司馬遷は史記の中で義縦を酷吏（残酷な役人）の分類に入れました。

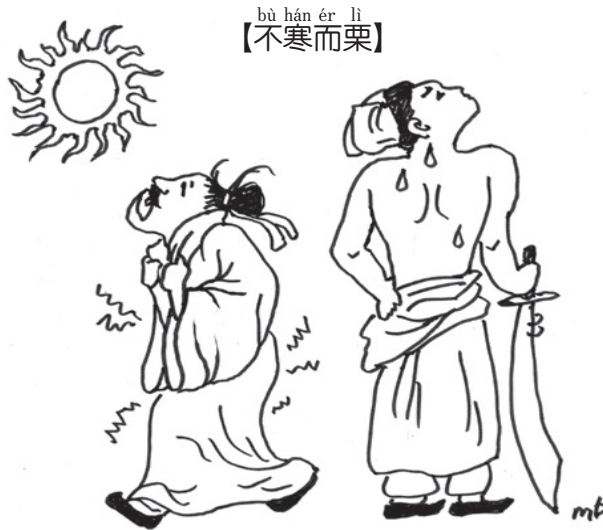


イラスト 満柏

〈注記〉

1) 義縦(?～紀元前117年):は、前漢の人。河東の人。漢の武帝の時代の酷吏と呼ばれた官僚の一人。

【諺・慣用句】の挿絵を描いて下さっていたイエリンさんのお仕事が、この所、多忙を極めています。当面、イエリンさんご夫君の、水墨画家・満柏氏がピンチヒッターを務めてくださることになりました。軽妙な漫画風の味わいをお楽しみください。

満柏氏は、日中水墨協会を主宰され、横浜周辺各地で水墨画の指導をされています。'わんりい' 本号最終ページに、鶴川市民センター教室での体験を呼び掛けていますのでご覧ください。

今は昔、春秋戦国時代の話です。

楚国(今の湖北省)の西に荆山という山が高く聳えています。山の麓に卞家荘という村がありました。この村の人の苗字は殆ど卞というのです。

村の人びとは、薪を伐り出したり、漁をしたり、穀物を作ったりしながら、それらを市で売って生計を立てていました。

この村に、卞和という若者がいました。卞和の両親はとうの昔に亡くなり、少年の頃から一人で暮らしてきました。卞和も村人同様に毎日山へ行って薪になるものを伐り出し、自分が使用する分を残し、他は全て市でお金に換えながら貧しい生活を送っていました。

しかし卞和は、実は「隔石段玉」(原石の中に玉の存在を知る)という誰も真似ができない素晴らしい鑑識眼を身に着けていました。

卞和の家は、本来は薪を伐り出すのが生業ではなく、祖父、父親たちはかつては名高い玉の細工師だったのです。玉石彫刻の高い技術を持っていたばかりでなく、原石を鑑定する秀でた技も持っていました。卞和は幼い時から祖父や父のそばで育ちましたのでその技を自分の目で学び、また教えられたりして、家伝ともいえる原石鑑定の技を身につけました。しかも卞和のその技はまさに「青は藍より出でて藍より青し」と人々に評されるほどの優れたものでした。

美しい色や不思議な光沢を持つ玉は、中国古代から、神と人を結ぶ神秘的な力を持つ宝物と思われています。神様を祀る重要な祭祀に使われたり、帝王たちの印章にしたり、貴族たちのお護りにしたりして、中国の人々に愛されてきた貴重な宝物です。

しかし、美しい玉となる資質はいつも原石の中に包み込まれていて、専門的な知識を持つ鑑定士でないと見極めることができません。ですから美しい玉は容易に見つけることができませんし、容易に手に入れることもできません。だからこそ「珍しいものほど貴ばれる」のです。しかも優れた細工

技術を持たなければ美しい玉を作り出すこともできません。

春秋時代では玉は皇帝や、貴族たちだけが持つことを許され、庶民は持つてはいけなかった。もしも庶民がこっそり玉を持っていることを役人に知られたら、禍を招いたに違いありません。

その頃の朝廷は、玉をたくさん必要としていたので玉の細工師を多数雇っていました。けれども卞和は、素晴らしい鑑識眼と技術を持っていても、あまりに若く、知り合いの引き合いもなく、宮廷の細工師として働くことができないでいたのです。

ある日、卞和が山で薪を伐りながら歩いていると、一つの大きな石が目を引きました。

「あれ! この石の表面には不思議な線があるし、微妙な色合いをしている。どう見ても普通の石ではないようだ」

と思いました。

卞和はその石の周りを回りながら、長い時間を掛けて石の筋目や、色合いなどを細かく観察した結果、自分でもびっくりするような結果が見えてきました。その石の真ん中には世にも珍しい玉になる素材が潜んでいるのを確信したのです。

卞和は深く考えました。

「我が国は、領土が広く人口も多い。しかし、王は爵位が低いのでお立場も弱い。これまで我が国は他の国から軽んじられ、虐められ、攻められてもきた。もし我が国に他の国が手に入れることができないような玉があるのが分かれば、他の国の羨望的となり、尊敬されるようになるだろう。そうならば、戦争も起こらず国は平和になり、庶民たちは安心して働くことができ、幸せな生活ができるだろう。

周の時代は、公、候、伯、子、男の五つの爵位で国を封じましたが、楚の王はその中でも「子」の爵位の為、他の国の王に比べて「弱い立場に甘んじていました。そこで卞和はこの原石を大王に捧げ、国

を強大にしようと思いました。その時の楚の大王は、厲王でした。

原石はとても重いので、彼は親友である新成という若者を呼んで二人で力を合わせその原石を村へ運びました。宝物が運ばれてきたという噂が広がり、村の人々は揃ってその石を見に来ました。卞和が自分の考えたことを村民たちに説明すると、みんなが大賛成しました。

村民達それぞれが卞和と新成の為に弁当を持ち寄り、旅費を出し合い、準備万端整えると、卞和と新成の二人は原石を牛車に載せ都へ出発しました。

山を登ったり、川を越えたりして、何日もの日数を掛けて、やっと都に辿り着きました。

山里で生活していた二人にとって都は眩暈を感じるほどの賑やかさでしたが、二人は何れもあれ持参した宝物を大王に捧げることが一番大切だと思っていましたから街を見物してみようとも思いませんでした。大王がいらっしゃる宮殿がどこにあるかも知らない二人は、道を尋ねながら長い街道を抜けて前に進んで行くと高く厚い壁に囲まれた立派な屋敷の前の、広い広場に出ました。

その屋敷の門は、何重にも重厚な屋根を載せた豪華なもので「章華宮」という大きな扁額を高く掲げていました。門の両側には武器を持った兵士が立って厳重に守っています。」

「間違いなくここが宮殿に違いない」と二人にはすぐ分かりました。二人は原石を牛車から下し、縄で天秤棒に縛り、その天秤棒の前後を担いで建物の入り口に向かって進んで行きました。

「止まれ！何者か？」
門を守っていた兵士は二人の見るからに貧乏そのものの農民を見かけるとすぐ叫び止めました。

「俺たちは荆山から来たものでございます。荆山で宝物を見つけたので、大王に捧げようと思って参りました」

と卞和が説明しました。
「宝物だと？この石がか？嘘じゃないのか。大王は天下の宝物を溢れるほど持っていらっしゃるの知らないのか。辺鄙な山奥で宝物を見つけた

なんて聞かされて誰が信じるものか。早く遠くへ行け！」

「お願いします。私は本当に山で世にも珍しいと思える宝物を発見しました。我が国が強くなるため、大王に献上したいと思っております。どうかお国の為にもお通しください。きっとお役に立つ筈です」

「おう、ちゃんとした理由があるんだな。じゃ、ここで待て！大王が招き入れるかどうか分からないが、とりあえず、報告してみよう」

兵士はそう言うと宮殿に向かいました。

長い時間が経ち、やっと兵士が出て来ました。

「おい、二人、今日はお前達は運がよい。大王は大層なご機嫌で、暇もあるし、通してやれとおっしゃった。ただし、入れるのは一人だけだ。大王に詳しく説明申し上げた後、必要が生じたら此の石を運んでいこう」

二人は、大王に会えると聞いて大変嬉しくなり、新成が残って原石を見守り、卞和が服装を整えて宮殿に向かって行きました。 (続く)

“わんりい”は、いつでも新入会を歓迎しています。
新年度(4月)入会年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座:00180-5-134011 ‘わんりい’
途中入会申し込みの方は、入会時期によって割引されますので、下記へお問い合わせください。

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると

- ①年10回おたよりをお送りします。
- ②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100(事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

中国は悠久の歴史を有し、国土は広大である。古代から今日に至るまでの歴史を振り返れば国土のあちこちで覇権争いや小競り合いを繰り返し、さらに厄介なことに異民族との攻防は時の政権をなんども苦しめ、有るときは転覆の憂き目にあった。

戦いは絶えなかったがそれぞれの時代、それぞれの地域で後世に語り継がれる歴史物語が生まれ、歴史に名を残す人物があまた現れた。紀元前の戦いの中で、我々日本人にも強烈な印象を与えた歴史物語は「呉越戦争」であろう。

それは周王朝の力が衰え始めた春秋時代(BC770年～BC403年)のことである。呉は紀元前514年に闔閭(生年不詳～BC496年)が今の蘇州に周圉25kmの城壁を築いて都とした。(この城壁は、盤門など一部を除いて今は無い)彼は後述する名臣・伍子胥を得て呉を一大強国に成長させた。越は会稽(今の紹興市)を都とした。

今回からは蘇州市について連載するが、あまりに記述すべきことが多いので整理するためまず有名な呉越戦争あたりから書き始めることとした。

呉は闔閭(第6代王)とその子夫差(第7代王)が特に有名であるが、どの国も急にそこにできたわけではない。呉としての初代の王は、「寿夢」である。姓は「姫」で名は「乗」と言った。彼の時代に呉は強大になり、彼が初めて王を名乗ったのだ。しかし物事には何でも前段というものがある。

呉の遠祖は周の「古公亶父」と言われている。彼の姓もやはり「姫」であり、呉は名門・周の流れを引いた国である。最後はBC473年に越によって滅ぼされていくわけであるが、その越もそれから140年命脈を保った後、BC334年に楚によって滅びた。

ここで古公亶父について少し付け加えておきたい。彼はあまり知られていないと思うが周王朝(BC1046年頃～BC221年)の初代王の武王の曾祖父である。(四書)五経の一つ、詩経の大雅編のなかで周という国の成り立ちを詠った詩に登場する。それによるとりっばな人物であったようだ。

彼は西安の西、約135kmに位置する「岐山」という山の麓に周の国を建て、国家の基礎を造った。周が約400年後、洛陽に遷都(周の東遷)するまでこの場所が都であった。一説によると、日本の岐阜という地名は織田信長が岐山の「岐」と孔子の生地曲阜の「阜」をとって命名したと言われている。こんな素晴らしい名前を付けてもらって、岐阜の人はさぞ鼻が高かろう。

話を元に戻そう。呉と越の抗争には、主役である呉王夫差と越王勾踐の他に脇役が何人かいるが、特に伍子胥という名臣と古代4大美女のひとり西施が花を添えている。そしてこれらの登場人物により、後述するように有名なことわざが生まれ人口に膾炙されている(「臥薪嘗胆」「会稽の恥(を雪ぐ)」「西施のひそみに倣う」「呉越同舟」等)。

呉越戦争の物語は皆さんよく御存じの通りだが、簡単に経緯を辿ってみると——蘇州城を築いた闔閭が越王・勾踐に殺害された時から始まる。息子の夫差は「薪の上で寝て」(臥薪)死の間際に言った父の遺言を忘れないようにした。そして力を蓄え、ついに越に攻め込み勾踐を会稽山(紹興市南部にある山)で打ち破った。そこで勾踐は夫差の臣下にさせられ、妻を妾として差し出すという屈辱を受けた(会稽の恥)。この時勾踐を殺害していれば歴史は違った展開を見せたであろう。伍子胥は後顧の憂いを除くため生かしてはダメだと強く進言したが夫差は受け入れなかったのである。

夫差は詰めが甘いと言わざるを得ない。勾踐は、呉の属国になった悔しさから毎日のように苦い熊の胆を嘗めて、呉に対する復讐を誓った(嘗胆)。

夫差に対する復讐に向けて勾踐は様々な策略を使ったが、その一つが美女を献上する作戦であった。美女たちの中の一人が傾国の美女「西施」であった。夫差はすっかり西施の虜になり、次第に政務がおろそかになっていく。そして彼女を喜ばせるために「木洸」の壘岩山に館娃宮という大御殿を建築するなど彼女の歡心を買おうとした。やはり夫差はトップ

の器ではなかったということだ。

ここで再度すこし長い横道に入る。「木洩」についてである。私は蘇州には4度行ったが、木洩には2003年に初めて行ったとき友人に案内してもらった。その時地名の由来を教えてもらった。木洩は蘇州市内から西南に10km離れたところにあるが、太湖に臨み、二つの運河が合流して、蘇州、太湖、揚子江を結ぶ交通至便の地であるため、物資の集積地となり、軍事の要衝ともなり歴史上も重要な地となった。



木洩にある「古松園」にて

その地に大御殿を建てるにあたって、かなりの木材を必要とされたため運河や河川を利用して運搬したが、量が多すぎて水路が詰まってしまったのである。その光景を「木塞於洩」(木が水路を塞ぐ意一洩は水路の意味)と表現し、それから木洩という地名となったそうだ。

蘇州の周辺には「水郷古鎮」と呼ばれる観光地がたくさんある。周荘、朱家角、同里、甪直、烏鎮、西塘、とあげればキリがないほどである。これは長江が運ぶ土砂が堆積して形成されたため、網の目状に水路が入り組んだ地形となったことによる。

整然と造られた街ではなく田舎ののんびりした水郷風景が今は観光地に変貌し多くの人を呼んでいる。この木洩も水郷古鎮として有名である。そしてほかの水郷古鎮とは一味違うと言えよう。先ずは前述の「館娃宮」があったことだ。

蘇州市の西には太湖を見下ろすようにいくつかの名山が連なっている。山というより丘の方が適切かもしれない。その一つに高さ180mの「靈岩山」がある。この山頂付近に建てたようだが、2500年前のことであるから勿論今は無い。ただ現在も残っている山頂花園は、館娃宮の遺跡と言われているそうだが、やはり山頂にある「靈岩山寺」にあったという説明もある。いずれにしてもこの山の頂あたりに建てたことは間違いない。ここで夫差と西施は永遠の愛を語らったのであろう。

靈岩山寺は空海が入唐時、長安への道すがら立ち寄った名刹である。さらにこの寺はもう一つ日本と

の関わりがあり忘れられない寺院である。それは八女茶(福岡県)の故郷でもあることだ。明代にこの寺で修行した栄林禅師が茶の実を持ち帰り、福岡に靈巖寺を建立するとともにこの地に茶を育てたのだ。それが八女茶というブランドに成長した。同寺院境内には、「八女茶発祥記念館」があるそうだ。いずれ靈岩山寺にも靈巖寺にも足を運びたい。

館娃宮の話が長くなったが、木洩には今も「西施橋」がある。中国独特の石橋であるが橋の中央には小さな四阿が乗っかっていて、とても風情がある。観光客、特に女性に人気があり橋をバックに写真を撮るので賑わっている。

いつも思うのであるが日本には橋の文化が感じられない。多くはコンクリートの橋脚の上にガードレールが取り付けられているような物ばかりで、本当に情けなくなる。新潟の萬代橋や長崎の眼鏡橋のような橋をもっと造ってほしい。どちらも数少ない日本国の重要文化財であるが、さすれば中国では重要文化財が数えきれないほどあることになる。

木洩が他の水郷古鎮と違うもう一つの点は古鎮内にいくつかの有名な庭園があることだ。蘇州市の中心部には拙政園をはじめ世界遺産の庭園がいくつかあるが、この木洩にも負けず劣らず立派な庭園がいくつかある。先ずは「嚴家花園」である。

この名園は、清の乾隆帝(1711年～1799年)時代の詩人・沈徳潜の別荘であった。その後光緒帝の時代に台湾の豪商・嚴国馨の手に渡り、嚴家の庭ということで「嚴家花園」と呼ばれるようになった。約

3千坪の敷地は春夏秋冬の4つの風景で区切られているそうだ。中国の著名な建築家からは「江南庭園の經典的作品」と称されているとのこと。經典とは、〈古典的とか、権威がある〉という意味である。もう一つ「古松園」も有名な庭園である。

この庭園には2003年の時案内してもらった。この庭園は清の末期に富豪の蔡少漁さいしょうぎょの邸宅として完成した。一番の見どころは裏庭に当たる庭園である。前述の靈岩山を借景とし、太湖石をふんだんに使った庭園は蘇州市中心部の庭園とは一味違った様相を呈している。古松園の名の由来は、羅漢松が植えられていたことから来ている。羅漢松とは日本では「榎の木」のことで、中国では風水で最も縁起のいい木との評価をされているとか。私が訪ねたときは名前の由来まで知らなかったので、この羅漢松があるのかどうか気づかなかった。

蘇州市の世界遺産の庭園は次号で書こうかと思っているが、一言だけ付記しておきたい。この蘇州市近郊の庭園はどの庭園も例外なく太湖石と先が反り返っている屋根の建物が見られる。私は日本人だから、中国のこの手の庭園はどうも落ち着かない。太湖石はどう見てもセメントで造ったみたいだし、先の反り返った屋根を見ていると龍が跳ねている印象を受ける。その上観光客があふれればかりにいて、しかもおしゃべりで雰囲気壊されてすぐ外に出なくなる。日本の庭園はいろいろな自然石を使い、池も「心」の字を象ったり、松などが池の水面を覆うように植えられているさまを見るとき、静寂のなかの美しさを感じてしまう。

もう一度西施に戻る。彼女について書けばとても紙幅が足りないなのでここでは古代4大美女を紹介しつつ書いてみる。4人とはご存知のように、「楊貴妃やうきい」「王昭君わうしやうこん」「貂蟬てうしやうひん」そして「西施せいし」である。

彼女たちの生きた時代はすこしずつ異なる。西施は既述の通り春秋時代であり、「楊貴妃」は唐(618年～907年)代、「王昭君」は前漢(BC206年～AD25)時代、「貂蟬」は後漢(AD25年～AD220年)である。古代と言っても随分幅広い。実は4人の美女を一言で表す別称がそれぞれにつけられている。また別称の由来をまとめると次のようになる。

●楊貴妃：「羞花」 楊貴妃が後宮を散歩すると、彼

女の美貌と体から発する芳香に庭の花々が気圧されて(羞らうように)萎んだという故事による。

●王昭君：「落雁」 国のために異邦に嫁ぐことになった旅の途中、故郷の方向に飛び去る雁を見て望郷の思いを込めて琵琶を奏でたところ、悲しい調べと彼女の美しさに雁は羽ばたくことを忘れ地上に次々と落ちたという故事による。

●貂蟬：「閉月」 天下を憂い、物思いに耽る姿のあまりの美しさに月も恥らい雲の中に隠れたという故事による。

●西施：「沈魚」 (沈は中国語では「沉」)西施が川で洗濯をしていたとき、その姿に見とれた魚たちが泳ぐのを忘れたため川底に沈んだという故事による。

いつの時代にこれらの別称がつけられたのかは知らないが、4人とも甲乙つけがたい。

ちなみに中国語の辞書で引くと、「美人の容姿のすぐれてうるわしい」ことを「閉月羞花」というと出ている。呉越戦争の書き初めに、いくつかの諺を挙げた中に「西施のひそみに倣う」があった。四字熟語で「東施効顰とうしこうひん」とも「西施捧心せいしほうしん」とも書く。西施は胸が痛むという持病があった。発作が起きると胸元を押さえ眉間に皺を寄せるその姿はあまりに美しく魅力的であったため、近所の「東施」という女性が真似をして顔をしかめたところ、一層醜くなったという故事から来ている。

つまり「いたずらに人の物まねをして世の笑いものとなる」という意味だ。ちなみに「西施」という名であるが、本名は「施夷光し いこう」という。紹興市近郊にある苧羅村おらで生まれた。ここには「施」という姓の家族が東西二か所に住んでいたが、彼女は西側に住んでいたので「西施」と呼ばれるようになったのである。

さて夫差が捕えられ殺された後、西施はどうなったのであろうか。呉が滅んだあとの西施については次のような言い伝えがある。

①捕えられ生きたまま皮袋に入れられ、長江に投げ捨てられた。

②西施献上の策を立てた「范蠡はんらい」と共に越を逃げ出し、一緒に余生を過ごした。

実際は①と思われるが、私は②と思いたい。なお、陳舜臣の「小説十八史略」は②の言い伝えを採用している。(つづく)

■ 第48話：鏡を割ってしまえば大丈夫？

小胖が顔を泥だらけにして帰って来た。母親が鏡を手渡しながら言った。

「小胖、何て汚い顔なの。鏡に写してご覧なさい！」

鏡を見た後、母親に鏡を返そうとして下に落として割ってしまった。小胖は言った。

「ママ、汚れた顔は鏡に写って、その鏡が割れたから、もう、僕の顔はきれいになったよね！」

■ 第49話：笛の悲鳴

父親が、退屈しのぎに笛を吹いていた。息子が突然叫んだ。

「パパ、パパが空気を吹き込むと、笛がくすぐったいって悲鳴を上げているよ。放してあげてよ！」

父親が笛を口から離して訊いた。

「今、何て言ったんだい？」

子供が答えた。

「もういいよ、笛はもう叫んでいないから」

■ 第50話：書物の効用

妻は、子供が泣きやまないのではと

ほと困って、子供を寝かし付ける方法をいろいろ考えていたが、突然、良いアイデアがひらめいた。

夫を大声で呼んで、夫に何時も読んでいる本を持ってくるように頼んだ。

夫が訊ねた。

「この本を何に使うんだい？」

妻は答えた。

「貴方は本を読み出すと途端に、欠伸が出て、直ぐ寝てしまうでしょ。この本には眠気を誘う力があると思うのよ。その力をこの子にも試してみたいと思うの。読み聞かせたら直ぐ眠るんじゃないかしら」

■ 第51話：眠気は何処？

劉さんは、夜中に街中をブラブラしていた。たまたま友人と出会った。

友人「おや、劉さんじゃないですか。こんな夜中に街中で、何をしていますか？」

劉さん「この4、5日、よく寝られなくてね。眠気が何処に行ってしまったのか、今探している所なんですよ！」

(有為楠 訳)

詩人^{いんせりん}尹世霖の童詩の世界⑥

自然 II 金子總子

dēng tǎ hé xīng xīng
灯塔和星星

hǎi shàng de dēng
海上的灯、
tiānshàng de xīng
天上的星、
zhǎ zhe yǎn jīng
眨着眼睛。

xīng xīng zài shuō
星星在说：
wǒ duō hǎo kàn
我多好看、
zhuì mǎn yè kōng
缀满夜空。

dēng tǎ zài shuō
灯塔在说：
wǒ zhào háng dào
我照航道、
tiān tiān lì gōng
天天立功。

xiǎo péng yǒu shuō
小朋友说：
wǒ ài dēng tǎ
我爱灯塔、
yě ài xīng xīng
也爱星星。



qiū yè
秋夜

qiū yè de tiān kōng
秋夜的天空

xiàng tòu míng de lán shuǐ jīng
像透明的蓝水晶

yī shǎn yī liàng de xiǎo xīng
一闪一亮的小星

zhǎ zhe qí yì de yǎn jīng
眨着奇异的眼睛

hǎi miàn xīng guāng tiào yuè
海面星光跳跃

xiàng xīng xīng tiào tiào jìn shuǐ zhōng
像星星条跳进水中

lán tiān duì dà hǎi shuō
蓝天对大海说。

nǐ duō xiàng wǒ
你多像我

qiū yè de tiān kōng
——秋夜的天空

灯台とお星さま

海の上のともし火と
夜空のお星さまが
目をパチパチさせています

お星さまがいました
わたしはなんと美しい
満天の夜空を綴り合せているの

灯台はいいました
ぼくは航路を照らしているんだ
毎日役に立っているよ

子どもたちはいいました
わたしは灯台が大好きよ
お星さまも大好きさ



秋の夜

秋の夜空は
透明の 紫水晶のようだ

きらきら輝くお星さまが
不思議そうな眼を まばたきする

海面で 星の光が とびはねる
まるで 星が 水中にとびこむように

大空は海にいう
キミは わたしにそっくりだね
——秋の夜空のわたしに



今年の六戸町秋祭りは、見学も体験も出来て、とても有意義でした。

残暑が続いている中、町の秋祭りは一足先に感じる事ができました。本番の祭りのだいぶ前から、夕方になるとアパートの中でもトントンと太鼓の音が聞こえました。いつも静かなところですが、最初これは何だろうと思い、たまにアパートに遊びに来ている子供達に聞いてみ

たら「お祭りの準備をしています」と答えました。ちょうど中に太鼓の練習をしている子がいました。

好天の中、秋祭り初日の運行が始まりました。その日私は町の中心部で見学しました。各町内会のそれぞれ特色ある山車が華やかで、特にユニークな仮装が魅力的で面白かったです。二日目は朝から、大雨が続きました。当初これでは流し踊りはたぶん無理だろうとすごく心配しましたが、スタートの時間になると、意外にも雨が上がり、晴天になりました。綺麗な着物を着ている大人も、子供も真面目に踊り、沿道の皆さんの中には懸命に応援している方もいました。私も沿道に立ってこの優美な踊りを見て目の保養になりました。

お祭りの前夜、私のアパートの前に華やかな山車が現れました。近づいてみると中国の「三国志 蜀軍南中平定戦」という題材の物でした。これはすごい、よく作っているなと自ら感嘆しているところ、周りにいた近所のみなさんに中町のお祭りに参加するようにと誘われたので、私はすぐ皆さんのご

好意を受けました。それで、最終日の昼、私は先ず中町の公民館で用意された着物を身に纏い、六戸小学校で待機しました。出発してから仮装の後ろについて歩き始めました。ちょうど私の目の前では「シンクロ」をテーマにした仮装で、演者は若い男性たちで、全員女装をしていて。皆さんが登場した時、沿道から大きな歓声があがり、町に活気を付けました。あまりにユーモラスで本当に面白かったです。優秀賞を獲得したのはやはり皆さんの努力の結果だと思いました。



盛り上がったところでお祭りが終了しましたが、夜の飲み会でまた皆さんと交流ができました。中国の祭りの仕方も来年入れたら良いという話もありました。別れるとき次の反省会で中華料理の水餃子なども作りましょうとの約束もしましたよ。

この秋祭りを通して地域の皆さんと交流を深め、とても有意義な再びのお祭りでした。



「鄧さん頑張る・日本探検記」は、2004年から2006年の2年間、青森県六戸町の国際交流員として国際友好活動にかかわった、中国山西省太原市に住む一中国人・鄧仁有さんの日本体験です。文章は原文のままです。

中国の変身（一九九二年）

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

私が初めて北京へ行った時の思い出を述べてみます。それは、1992年1月でした。当時の北京空港は、日本のローカル空港かと錯覚するほど閑散としていました。飛行機は4～5機あるだけでこれが“大中国”の首都、北京の飛行場なのかということぐらいしか記憶に残っていません。

訪中の目的は、私が広告関係で担当していた資生堂が北京の化粧品会社の麗源化粧品会社と合併して立ち上げた資生堂麗源化粧品会社のオープニングセレモニーに参加することでした。

北京空港から市内までは、ポプラ並木が整然と並んだごく普通の一本道。並木の高さが一定しているのは建国時にいっせいに植えたからだ、と想像しながら約1時間。現在のようなハイウェイは想像もできませんでした。

やがて宿泊する中国大飯店に到着し、チェックインです。ところが予約がない！ということで戸惑っていましたがVIP (very important personの略。ホテルの重要顧客) の受付は別のコーナーにあることがわかりました。当時のホテルは20階から上の2～3フロアはVIP用でした。待遇が一般客とはまったく別だということがわかると、共産主義国なのに？との違和感を覚えました。

朝カーテンを開けて「下界」を見るとスモッグがたなびいており、その下を、人民服をきた人々が自転車に乗って続々と工場へ向かう姿が眼に入りました。現在はSOHOやCBD (中央ビジネス地区) というオフィス街として高層ビル群で埋め尽くされていますが、当時は工場が乱立していました。中国大飯店は、その後新築したようです。現在の規模は、以前の2倍ぐらいの大きさです。建国路にはLGのマークをつけた高層ビルが2棟そびえています。感心していると、慰めるように「国際貿易センタービル」を

指差して、あそこには日本の大企業がたくさん入居しています、と。

オープニングセレモニーはこのホテルが会場でした。共産党や北京市の幹部の挨拶が続きました。居並ぶ幹部はそれらしき態度で拍手・拍手。現在のテレビで見る党大会みたいでしたが、中段以降のお客は、そんな挨拶はまったく聞いていません。これも新生中国なのかと納得しました。

セレモニーが終了してから北京最大の繁華街王府井をブラブラと見物しました。ちょうど春節休暇でひと・ひと・ひとでした。百貨店らしき店に入りましたが、店員もお客も髪はオカッパスタイルで紺色の人民服。店員が品物を「放り投げるサマ」を見て愕然とした記憶があります。

店員は公務員、客は農民。客をもてなすなどという気はまったくないのです。品物を買うときは、レジでお金を支払い、レシートをもらい品物と交換してもらうことにもビックリしました。この習慣は今でも続いています。当時は手書きでしたから見てもイライラしたものです。この習慣は百貨店が売り上げを管理するので出店社が売り上げをインチキするのを防止するためのようです。な～るほど……と納得。

万里の長城も見学しました。たぶん八達嶺だっただろうと思います。宇宙から見える唯一の建造物*) だそうです。こんな巨大な壁を作った古代の中国人は、ヒトを何だと思っていたのか。すごいというより、ばかばかしいと思ったのが正直な実感でした。エジプトのピラミッドは、直接見たことがありませんが、あれにも同じ気持ちです。ピラミッドは労働者とその家族と一緒に暮らしていたとのことなので、まあ許せるかな。ヒトを人とも思わない古代の中国は、戦後教育を受けた私には理解できないことでした。

*) 2003年、中国初の有人宇宙船「神舟5号」に搭乗した揚利偉が「見えなかった」と言ったので教科書から削除した。(ウィキペディア)

万里の長城の帰途、明十三陵にも立ち寄りしました。お墓にはあまり興味がなかったので、誰のお墓か忘れてしまいましたが一箇所だけ見学した記憶があります。22年前の北京は、広い道路の建設途上でした。

万里の長城への道すがら、麦藁帽子の農夫が馬車に麦わらを山のように積んでパカパカ歩いていたり、自転車群が車道を埋めていたりする光景しか記憶にありませんでした。

それから10余年後、北京の映像制作会社と付き合い合うようになり、頻繁に通うことになりました。空港は日本のODAで立派に変身。世界各国の飛行機が並んでいることにビックリしました。空港から市内へはハイウェイができていました。旧街道を探すと市内に向かって右側にそれらしき姿がチラホラ見えました。後日その旧街道を走りたいという運転手は“知らない”とのこと。

さて、北京での仕事は、「制作費を日本の会社が投資して、北京の会社が中国の世界遺産（当時は38箇所）をハイビジョンで撮影する」で、伊藤忠・角川・小学館・ADK（広告）など、それなりに名の知れた会社が名を連ねましたがいくつかトラブルが発生しました。調べてみますと投資をした会社のトップが「中国大好き」であるにも拘らず、担当窓口は興味を持っていないというが分かりました。それがトラブルの原因で、中国側の要望が伝わりません。そうした事情から私が中国側の代理人として請われたわけです。

日本企業の長所も短所も熟知していますから、相手の弁護士と直接交渉してほぼ“満額回答”。この時の経験は貴重でした。中国ビジネスのイロハを学びました。完成した世界遺産の番組は北京オリンピック開会式前日までの38日間、CCTVの1チャンネルのゴールデンタイムで放映されました。中国人の誇りを盛り上げることに貢献したと思います。

思い返せば中国の「変身」は、私の短い経験の中でも容易に見て取れます。北京の定宿（東三環路）の窓から下を見ると朝夕のラッシュ時の車の行列は日々、目に見えて激しくなりました。行くとたびに

高層ビルが新築され、“あれっ？”と思うことが度々ありました。

大好きだった四合院も姿を消してしまいました。その変身というか成長の度合いは東京オリンピックのころと同じ。そういえば北京オリンピック、上海万博などを立て続けに実施したことは、まったく日本の後追いです。

一級都市の地下鉄・高速道路やマンション建設が限界に達しつつあり、高成長を支えるのは高速鉄道などの整備が最後の砦ではないでしょうか。その

後、話題から消えつつありますが中国版バブルといわれる「理財商品」問題も解消したわけではありません。いいところも悪いところも「日本の後追い」する中国の変身は吉と出るか凶と出るか。よい方向になることを期待したいと思っています。



初めての万里の長城 1992年

【‘わりい’の原稿を募集しています】

‘わりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又‘わりい’の活動についてのご希望やご意見及び‘わりい’に掲載の記事などについても、簡単な感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル ‘わりい’

さる9月3日(20014年)から8日まで北京経由で故郷の瀋陽(中国遼寧省)に一時帰省しました。半年ぶりの中国ですが、相変わらず大変な活気があり、帰るたびにその凄まじい発展ぶりに驚くと同時に、故郷瀋陽の変化に喜びを覚えています。9月3日の夜に北京に到着すると、姉が車で空港まで迎えに来てくれました。姉の家に2泊したのち、9月5日の朝の便で瀋陽へ飛びました。はやる気持ちを抑え順調に瀋陽へたどり着いたときはいつもより嬉しさが増していました。

実は今回の帰省の一番大きな目的は、両親の新しい家を見ることです。都市再開発のため、再開発が終わったら戻れるという約束で、両親は3年前に20年間住み続けた家から立ち退きすることになり、一時的に家を借りて住んでいました。借家はそれまで住んでいた市の中心部より大分離れていて、持病を持つ両親が病院などに行くにはやや不便でしたが、やっと政府が約束した通りの新しい住宅ができて、住み慣れた元の場所に近いマンションに引っ越しすることになりました。

中国では居住者が内装工事を手配するのが一般的です。両親は5月から家の内装に奔走していました。内装に3か月が掛かり、その後新しい家具などを買い揃え、着々と引っ越しの準備をしていました。

私は瀋陽に着くと、簡単なお昼を済ませ、早速両親と一緒に新居を見に行きました。新居は瀋陽市中心部一遼寧省工業展覽館のすぐ近くにあります。ここは地下鉄2号線が通っていて、交通の便が非常によく、周りに大きな病院やスーパー、公園などがあります。瀋陽音楽学院、東北大学、魯迅美術学院などの大学からも非常に近いです。新居は31階建てのマンションが5棟も立ち並んでいるマンション群の中で一番道路に近いほうの29階にあります。立ち退きの前には7階建ての2階でした。29階からの眺めは開放的で風通しもよく、あまりの差にびっくりしました。家中がピカピカで新居の独特のにおいがしていまし

た。両親の嬉しそうな笑顔を見てホッと、やっと二人は安心した老後をこれから迎えられるなど感じました。

5日の夜は借家に戻り、次の朝は母と近くの朝市に行ってきました。瀋陽に帰るたびに私は必ず朝市に行っています。小さい時から休日になるとよく親についていって油条ヨウディアオという揚げパンや豆乳、新鮮な野菜や果物などを買いに行っていましたから朝市は私にとって思い出がたくさんある場所です。

半年ぶりの朝市は、二日後に年に一度の祝日一中秋節を控えていたこともあり、前回よりもさらに活気を呈していました。野菜、秋の味覚のさまざまな果物、鮮魚の品ぞろえは大変豊富で、作りたての熱々の豆腐や近郊の農家からの搾りたての牛乳もありました。母が大粒の葡萄やいきのいい蟹、中秋節には欠かせない月餅も買ってきました。つきたてのあたたかいお餅も食べてみたくて買いました(写真①)。

中秋節の前の朝市は行き交う人々の笑顔でにぎわっていました。やはりここに来ると落ち着く自分がありました。

次の日、新居のある工業展覽館(写真②)から地下鉄2号線に乗り、町の南の方にあるオリンピックのサッカー場の近くまで散策しました。地下鉄の乗客には若者が特に多かったです。地下鉄2号線は昨年12

月に運営し始めた路線で車内に荷物棚がないなど日本と違う部分もありますが黄色の椅子が非常にモダンで印象的でした。駅の構内も新しいし、表記も分かりやすく、そして何よりも目に飛び込んできたポスターに引かれてシャッターをたくさん押しました。

スローガンが良い市民になることを呼びかけています。瀋陽市をはじめ、東北地方を振興させようと、市民に東北振興への協力を呼びかけるスローガン掲示のをたくさん見かけました(写真③)。また、マナー向上などの呼び掛けのポスターなども多種類ありました(写真④)。

中秋節の3連休を前にして里帰りした人が、大学

我が故郷・瀋陽への想い

崔 貞(黒田真子)

生か不明でしたが、若者の一人が私の父に席を譲ってくれました。日本の電車であまり席を譲るシーンを見掛けません。日本と中国では文化の差があるのだと思いますが、市民のモラルが向上してお年寄りを尊重する風潮が戻ってきていると感じました。

オリンピックのサッカー場の近くの町も新しくなって、世界の有名ブランドを50店舗揃えているモールも新たにできていて綺麗でした。

今回の帰省で一番良かったと感じているのは故郷の著しい発展ぶりです。ハード面だけでなく、若い人の礼儀や伝統を重んじるといったソフト面での変化も見られて心の底から嬉しく思いました。これからも調和の取れた社会に向けて変身し続けてほしいと願い込めて次回の帰省を楽しみにしています。



写真1 朝市の餅つき



写真2 工業展覽館



写真3 東北振興への協力を呼びかけるスローガン「東北を再び振興させよう！瀋陽は再びリーダーシップを取ろう！」

1950年代の東北地域は産業技術が進んで経済発展のリーダーでしたが、1990年代の国営企業の改革と、沿岸地域の経済特区の発展著しい中で、東北地方は次第に経済的な遅れを取るようになりました。ここにきて中国政府が再び東北開発に力を入れ始めています。「瀋陽がリーダーシップを取ろう」というこの電子掲示板から瀋陽市政府の意気込みが見て取れます。



写真4 「徳を高め善を拡め、謙遜で礼儀正しい瀋陽市民になろう」

近年、中国は急速な経済発展に伴って精神的な支えを見失ってきています。市民のモラル向上を図ってポスターの宣伝に力を入れています。

崔貞(黒田真子)さんは、今年8月に入会以来、'わんりい'の活動に積極的に参加下さっている新会員です。「大妻女子大学文学部コミュニケーション学科講師、町田国際交流センター・外国人相談部会の会員として活躍しています。遼寧省瀋陽市出身。'わんりい'HPに崔貞さんの写真のページが加わりましたのでご訪問ください。

<http://wanli-san.com/pictur/ph-title.htm>

世界の国々のことを知ろう!⑬ バルト3国を旅して

於：町田市民フォーラム3F・視聴覚室 2014年9月22日(月)

為我井輝忠

9月22日、町田フォーラム視聴覚室で、為我井輝忠さんの、バルト三国旅行の報告会「バルト3国を旅して」が開催されました。

バルト三国は、ヨーロッパの秘境とも言われているところですが、其の帰属には複雑な歴史があるようです。三国揃っての独立運動は、ソ連邦の崩壊の引き金になったとも言われています。直接現地を訪問された方のお話を聞く機会は余りありません。為我井さんは、このバルト三国を1ヶ月かけてご自分の足で見て来られました。

10月になれば又フィリピンへ日本語教師として1年間赴任されますので、その前に、なかなか聴くチャンスのない、この地域のホットな話を伺いたいと企画したものでした。

当日は、定員28名と言うことで用意を進めたのですが、前日の21日に「町田広報・市民の広場」にこの催しの案内掲載を依頼していたこともあってか、直接会場にお見えになった方が10名余りもおられ、直前に予備の椅子の借り出したり、レジユメの追加コピーをしたりと慌ただしく走り回り、最終的に40名近くの方が為我井さんのお話を聞きました。日本から見れば、ユーラシア大陸を越えた反対側という遙か遠い小国ながら関心をお持ちの方

の多さに今更ながら吃驚しました。

為我井さんは、英国に1か月間滞在した後、コペンハーゲン経由で、エストニアの首都タリンへ飛行機で飛んで、その後はバス等の公共交通を利用して、心が赴くままにエストニア国内を巡ったとのことでした。

エストニアの東の端ナルヴァで、ロシアとの国境の雰囲気を感じ、東に転じて、バルト海沿岸の町へと向かい、更に南へ下って、南隣のラトヴィアに入り、首都リガを経て、ロシアのバルチック艦隊が日本海海戦に向けて出航した港町リエバーヤに行き、ラトヴィア国内を東西に横

断して、西の端の町から、更に南のリトアニアに向かいました。

ラトヴィアの西端の町ダウガピルスから、リトアニアの首都ヴィリニウスへは、一日一本しかないバス、ロシアのモスクワから来た長距離バスに乗りました。

リトアニアでは、昔の首都カウナスへ行って、日本のシンドラと話題になった杉原千畝さんの足跡

を訪ね、再びヴィリニウスに戻って、飛行機でエストニアの首都タリンへ飛んで、そこからコペンハーゲンに戻って、日本への飛行機に乗ったそうです。

バルト三国を巡り歩いた1か月の間



に、各地で沢山の写真を撮り、その土地の料理を楽しみ、人々と交流を重ねてくれました。講演会の前半で、美味しそうな食事、民族衣装で笑顔の人々、珍しい建物等、美しい写真を見せていただき、10分間の休憩を挟んで、後半では、為我井さんのバル

ト三国への旅の動機や、旅の印象など楽しいお話を伺い、最後に会場からの下記のような質問が次々に出て、時間を超えて答えていただきました。

(報告：有為楠)

質疑応答

【質問】 どうしてバルト三国に行ってみようと思ったのですか。

- これらの国はまだ行ったことがなかったので、一度訪ねてみたいと思っていました。メジャーな国よりもマイナーな国に興味があります。

【質問】 バルト三国内の移動は何を使われましたか。

- ほぼバスを利用して移動しましたが、列車も一度利用しました。また、最後にヴィリニウスからタリンまでは飛行機で戻りました。バスが一番便利で、運賃が安かったです。

【質問】 バルト三国の方たちの、旅行者に対する対応は如何でしたか。

- どの国でも旅行者に対して親切で、困っている人には何かと声を掛けたりして、これは観光立国としての姿勢かもしれません。

【質問】 ユダヤ人迫害の遺跡などを回っていらっしゃいますけれどそれはどうしてですか。

- 高校生の頃に読んだ「アンネの日記」あたりからユダヤ人に対する興味が始まったと思います。今回イギリスに滞在した折、ユダヤ人の青年と知り合い、彼からイギリスにおけるユダヤ人のことを知り、さらにバルト3国でのユダヤ人の存在を教えられ、興味を持ちました。実際にこれらの国で訪ね歩いてみたいと思いました。

【質問】 ツアーではなくご自身で世界60ヶ国を旅されたそうですが、バルト三国の生活レベルはほかの国に比べてどの程度と思われるか。

- バルト3国の生活程度はヨーロッパの中では中程度だと思いますが、最近は物価が高くなっているようです。

【質問】 宗教の違いが国と国の紛争の原因になっていることが多いですが、三国の宗教はそれぞれ異なるのでしょうか。

- 3か国とも宗教はキリスト教ですが、どの国もプロテスタントが多数を占めていて、その他にカトリックとロシア正教も影響が強いです。

【質問】 ウクライナの紛争の影響などはありますか。

- あると思います。これらの国はロシアから石油を輸入していて、将来、政治的な問題でストップされることもありえます。エストニアやラトヴィアにはロシア系の人々が30パーセントもいるので、ウクライナの二の舞になる可能性はあり得ると思います。

【質問】 治安はどうですか。

- 治安は何ら問題ありませんでした。イタリアやフランスなどの他のヨーロッパの国々に比べれば全く治安上の問題は感じられませんでした。

【質問】 これらの三国はそれぞれどんな産業で成り立っているのですか？観光産業が主ですか？

- 観光事業が大きな産業です。農業が主体なので大きな産業はほとんどありません。

【質問】 三国それぞれの国で地方にも行っていらっしゃいますが、これらの場所を選ばれたのは、目的があって訪れたのですか？

- それぞれ目的がありました。ロシアとの国境地帯の町、バルチック艦隊が出港した港町、エストニア最古の大学がある町、杉原千畝さんゆかりの町等訪ねたいと考えて選びました。

【質問】 エストニアのタリンで、2万人を超す参加者と歌を聴く10万人以上もの人々が共に歌う

という合唱祭に参加していらっしゃいますが、あの合唱祭は国にとっても相当大きな意味のあるイベントのように思いますが、合唱がどうして人々の間に浸透しているのですか。また、いつ頃から始まったのですか。

- 合唱祭はもう30年以上も続いている国民的的一大イベントで、ソ連からの独立に際し武力による抵抗ではなく歌によって抵抗し、独立への原動力になったそうです。そのため今でもその時のことを忘れないように行われています。最終日には大統領ご夫妻も出席されます。



2万人のコーラスと10万人の観客による「歌の祭典」
於：エストニア / タリン

【講師紹介】 東洋大学大学院修了。静岡、東京、神奈川で英語教育に携わるかたわら、日本スリランカ文化交流協会を立ち上げ、スリランカの教育支援に関わる。退職後、2007年より中国(大連市・福州市)及びスリランカの国立大学で日本語教師として赴任。今年10月よりフィリピンの大学で日本語指導の予定。著書に、『長期滞在者のための最新事情55・スリランカ』(1995年、三修社)と『カメラを通して見たスリランカ』(2011年、文芸社)の2冊あり。(わんりい会員)

ぼくが見て感じたスリランカ紹介 81

象の孤児院 II

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会)

ピンナワラにある「象の孤児院 (Elephant's Orphanage)」は、1975年にスリランカ政府野生生物保護局によって、マハオヤ川沿いにある10万m²程のココナツ椰子の林を切り拓いて設立されました。

親を亡くしたり、迷子になったり、親が育児放棄をした子象や、失明等の障害や怪我で野生に戻れなくなった成人の象を保護している施設です。当初は50頭ほどでしたが、2011年現在、88頭の象達が保護されています。

スリランカの野生の象は約3000頭と推定されているので、約3%の象が此処で保護されている勘定になります。象の孤児院で生育された子象達の中で、人に馴れたり性格のおとなしい象は、寺院や象使い等に引き取られて行きます。何頭かはお金持ちに引き取られるのでしょね。野生の象は群れを作って集団生活をしているので、此処で生育した象は、新たには群れに入れない為です。

象の孤児院には二大イベントがあります。一つは子象達へのミルクの授乳。4歳以下の子象には

1日5回ミルクが与えられます。この内9:15と13:15の2回が公開されています。僕も何度か見ましたが、特大サイズの哺乳瓶から凄い勢いでミルクをむさぼるように飲む姿は迫力と共に愛らしいものです。希望者は哺乳瓶をもって授乳する事が出来ます。

もう一つは川での水浴び。上記のミルク授乳時間のあと一休みして、10時~12時と14時~16時の2回行われます。象使い達に連れられて、丘の上にある孤児院からマハオヤ川までの数百メートルの間、道路を渡り、お土産物屋とレストランが林立する商店街を、土埃をたてて小走りに駆け抜けます。沿道にはたくさんの外国人観光客と共にスリランカ人の観光客も大勢詰めかけて、象の行進に見入っています。スリランカ人にとっても一度に100頭近い象を見られる機会は此処だけですからね。

下世話な話ですが、象の孤児院の入場料は2013年現在、外国人の大人が一人2000ルピーとかなり高額です。僕が住んで居た1990年代は外国人

の大人一人60ルピーだったので、他の物価上昇率と比べても雲泥の差ですね。これに対してスリランカ人の入場料は、1990年代は10ルピー、現在は200ルピーと外国人の十分の一とかなり低く設定されています。(外国人でも居住ビザを提示すればスリランカ人の料金で入れますが)。

象が川に到着すると、象使いは先ずは椰子の殻を使って、象の体をゴシゴシと洗ってあげます。象達は気持ちよさそうに、川床に横たわって体を洗ってもらいます。体を洗ってもらった後は、大きな体を水中に沈めて長い鼻を潜望鏡の様に水面に突き出してみたり、子象同士がじゃれて水を掛け合ったりして、川での水遊びを満喫します。その姿を観光客は川岸や、川沿いにあるレストランの棧敷席で食事を摂りながら見物しています。

2時間の川遊びが終わると象達は、象使いに連れられて孤児院に帰って行きます。来る時とは違って、川から離れるのを嫌がって歩みが遅いように、僕には感じられました。感心するのは、行きも帰りも大人の象が子象を外敵から守るように、大人たちの間に子象を挟んで行進する事です。孤児院だけに、それぞれの象に親子関係は無いのですが、それでも大人の象は子象を守り抜きます。

ツアーで行かれた方は、時間の都合で二大イベントの両方を見る事さえ難しい事と思いますが、実は二大イベントの他にも、是非とも見てもらいたい事があります。先ずは、象の食事風景です。象使いがビックリするほど多くの葉っぱや小枝、太目の木材を食事場所に運んできます。象は器用に鼻を使って葉っぱや小枝を纏めて口に運びます。此処までは日本の動物園でも見る事が出来ますが、太目の材木の食べ方に注目です。

先ずは足で踏んでひび割れを作ります。それぞれの象に好みの大きさがあるのでしょう。ひび割れに牙の先を突っ込んで細かく砕いて咀嚼を始めます。言葉に書くと長いですが、この作業を瞬時に行うので驚きます。子象達はミルクを貰っている所以この場所では食事をしません、じっと大人たちの仕草を見ている。そろそろミルクを卒業して、大人の

食事をする勉強をしているのでしょうか。

もう一つ見て頂きたいのは、二大イベントの間に象達が寛いでいる様子です。孤児院の広大な敷地のなかで、象達は好みの場所で日向ぼっこをしたり、土を被ったりしています。イベントの時に見せる姿とは違って見えます。僕は、川遊びの時の象の姿も好きですが、寛いでいる様子も大好きです。個人旅行でスリランカに行かれる機会のある方は、是非とも半日、象の孤児院でお過ごしください。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついでの折に田井にお渡し下さい。

◇わんりいの催し **ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう！**

◆あなたも私も笑顔が美しくなる！身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう!!

●町田中央公民館6F・視聴覚室

▲2014年10月21日(火)、11月18日(火)

▲時間：10:00～11:30

▲講師：Emme(歌手)

▲10月の練習歌「花は咲く」

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：15名(原則として)

*動きやすい服装でご参加ください

●申込み：☎042-735-7187(鈴木)

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



◇わんりいの催し **中国語で読む・漢詩の会**

◆漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!!

▲場所：まちだ中央公民館・学習室7

▲月日：2014年10月12日(日)

▲時間：10:00～11:30

▲講師：植田渥雄先生

(現桜美林大学孔子学院講師)

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

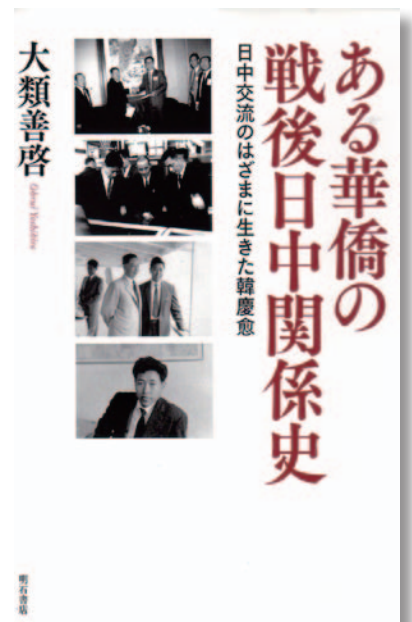
◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)

E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)



◆新刊紹介◆

中国黒竜江省ハルビン市郊外に合祀されている満蒙開拓団の方々の公墓の存在を、昨年9月号から11月号・3回に亘って紹介くださった、「方正友好交流の会」事務局長の大類善啓氏（一社/日中科学技術文化センター理事）による新刊が、今年8月末、明石書店より出版されました。著者・大類氏の、上梓にあたってのお気持ちをご紹介します。（田井）



定価：2300円（+税）
四六判 並製 248ページ

現在の日中関係に想う

『ある華僑の戦後日中関係史』

—日中交流のはざまに生きた韓慶愈^{かんけいゆう}—
（明石書店）を上梓して

大類善啓

大きい書店をのぞけば、「中国が崩壊する」と云った本が並び、週刊誌には反中感情や嫌韓感情を煽るような記事が躍っている。「日中友好」を望むような本が売れず、「中国脅威論」や「韓国嫌悪観」を煽るような本が売れるというのは本当に嘆かわしい。

思えば40余年前、日中国交回復を求める国民運動が全国的に広がり、政府を動かす力になった。国交正常化以前でも実は、民間レベルでの豊かな交流が広がっていたのである。

例えば1954年、李徳全を団長とし、廖承志を副団長とする新中国になって最初の代表団、中国紅十字会代表団の来日は「李徳全旋風」と呼ばれるほど日本の民衆は歓迎し、新聞は連日、好意的に記事を掲載したのだった。李徳全一行が京都から大阪へ向かう一時間、国道の両側から、人々は絶え間なく赤十字の旗を振って歓迎したのである。

その後、世界的な京劇役者・梅蘭芳^{メイランファン}を代表とする戦後初めての京劇代表団の来日の際、戦前の軍部の嫌な記憶がある梅蘭芳に対して周恩来総理は、「愛国的な芸術家であるあなたはきっと、心の中にわだかまりがあるでしょう」と気遣いながらも、大きな視野で日中の友好を願って日本での京劇公演を支援し送り出した。中国切っぴの映画スター・趙丹と高峰秀子ら日本映画人との交流など、国交回復以前に、豊かな日中の民間交流が生き生きと輝いていた。

本書ではまた、1953年から始まった華僑帰国運動についても詳細に紹介し、語られることの少ない「華僑からみた戦後の日中関係史として貴重な資料といえる」(〈解説〉加藤千洋・同志社大学大学院教授・元朝日新聞中国総局長)と評された。日中政府レベルの日中関係が冷え込む今こそ、本書を通じて、過去の交流を思い返していただきたいと思う。

おおるい・よしひろ：一般社団法人日中科学技術文化センター理事/
方正友好交流の会事務局長

E-mail:ohrui@jcst.or.jp

☎：090-2768-3338

当社の創設者であり、私の敬愛する韓慶愈さんの一代記が上梓された。激動の昭和時代に日中両国のはざまにあって志を立て、生き抜いて来られた韓さんの真摯な温かいお人柄が見事に描かれている。国と国との関係がどのようになっても、両国の国民がこのような生き方と交流を積み上げれば必ず道が拓けるものと改めて確信した次第である。(中略)韓さんは今回、同志の友人らと語らい「東方文明振興会」を立ち上げられ、総代表に推されて中国文明の振興とマナーの向上を呼び掛けられている。生涯を日中の友好交流に尽くされた韓さんのますますのご活躍を祈念したい。

野沢太三（一般社団法人・日中科学技術センター会長/元法務大臣）

※同書は、東方書店、内山書店、三省堂書店、紀伊国屋書店・他の中国史関連コーナー-或いはその周辺で購入できます。
明石書店の関連ページ <http://www.akashi.co.jp/book/b182615.html>

2014年 東京中国文化センター 主催

中国陶磁器 シリーズ講座

<http://tokyo.cccweb.org/jp/sy/zxyg/27625.shtml>

定員：80名 無料

会場：東京中国文化センター

(港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1階)

第一線で活躍されている中国陶磁器の研究者・専門家をお招きし、今秋シリーズ講座を開講します。ぜひご参加を!

【第1回】 10月6日(月) 16:00-18:00
「遠代陶磁の造形と装飾」 ※通訳付き
 講師：路 菁 氏 (北京大学考古文博学院 講師)

【第2回】 10月20日(月) 16:00-18:00
「中国古代の暮らしと夢」
 講師：矢島 律子 氏 (町田市立博物館 学芸員)

【第3回】 10月27日(月) 17:00-19:00*
 *第3回のみ開講時間が異なりますのでご注意ください
「清朝のやきもの」
 講師：中沢 富士雄 氏 (たましん歴史・美術館 副館長)

【第4回】 11月10日(月) 16:00-18:00
「中国のやきものを買う」
 講師：川島 公之 氏 (蘭山龍泉堂)

【第5回】 11月17日(月) 16:00-18:00
「曜変天目茶碗について」
 講師／長谷川 祥子 氏 (静嘉堂文庫美術館 主任学芸員)

◆ 問合せ：電話 03-6402-8168 東京中国文化センター

**“話し合いましょう!!”
 ユネスコ サロン**

in

第18回さがみはら国際交流フェスティバル 2014

— 2014年10月12日(日) 13:00 ~ 16:30 —

▲「プロミティふちのべ」ビル 1F JR横浜線淵野辺駅南口
 相模原市中央区鹿沼台1丁目9-15
 ☎：042-768-0221

特別講演：「ピースボートで世界一周」
 13:00 ~ 4:00 講師 青木忠氏

▲ 学生弁論大会；留学生と日本の学生との交流会
 留学生のスピーチ (5分 ~ 10分)

▲ 茶話会 ▲ 書画展示など

◆ 主催：まちだ・さがみユネスコ協会

◆ 問合せ：042-722-7736 (野々村)



第24回文化之日 (公財)日中友好会館主催事業

於：日中友好会館・大ホール (<http://www.jcfc.or.jp/>)
 (JR総武線飯田橋東口7分/都営大江戸線・飯田橋C3出口1分)

● 青海省民族歌舞団公演 <http://www.jcfc.or.jp/blog/archives/5424>

● 青海省タンカ芸術展 <http://www.jcfc.or.jp/blog/archives/5436>
 10:00 ~ 17:00 (9/26は15:00より、10/17は20:30、
 10/18は20:00まで開館)

★ 美術館イベント <http://www.jcfc.or.jp/blog/archives/category/event/museum-event>
 9月26日(金)15:45頃~タンカ制作実演、
 10月1日(水)14:00~(約40分)古箏によるミニコンサート(要申込)、
 10月17日(金)12:00~(約20分)チベット族の歌と楽器演奏(無料)

◆ 問合せ：☎：03-3815-5085 日中友好会館文化事業部

町田中国語講座 (毎月第1、第2、第4土曜日)

- 会場：まちだ中央公民館、町田市民フォーラム、まちだ文学館などの町田周辺の市の施設
- 講師：郁 唯 先生 (天津師範大学卒業) ※見学ご希望の方は事前に下記へご連絡ください。

▷ 午前クラス 10:15 ~ 12:15

- ▲ 会費：月謝：3か月 10,000円
- ▲ 対象：初心者の方も大歓迎
- ▲ 問合せ：☎ 042-725-3963 (森川)
 E-mail: ymorikawan@ybb.ne.jp



▷ 午後クラス 14:00 ~ 16:00

- ▲ 会費：月謝：4,000円/月
- ▲ 対象：ピンインの分かる方
- ▲ 問合せ：☎ 090-1425-0472 (寺西)
 E-mail: t_taizan@yahoo.co.jp

★ 午前クラスも午後クラスもアットホームな雰囲気でも和気あいあいと楽しく学んでいます。

初級中国語会員募集 (見学歓迎)

中国語を中国人女性先生から初歩の手ほどきをします

- 毎月第2、第4月曜日、15:00 ~ 17:00
- 藤の台団地内「スペースつばさ」2F
 (〒194-0032 町田市本町田3486-1-50-111
 藤の台ショッピングセンター内)
- 講師：張 恰申先生 (中国出身)
- 会費：1回ごと1,000円
- お問合せ：☎ 042-732-5081 (吉崎12:00 ~ 17:00)

岡上中国語研究会新会員募集

中国語を中国人先生から直接聞いて話して勉強してみませんか? 中国語初めての方が大歓迎。直接見学も大歓迎。

- 毎週土曜日 10:00 ~ 12:00
- 麻生市民館岡上分館 (215-0027 麻生区岡上286-1)
- 講師：劉 冠群 先生 (北京出身)
- 会費：月謝4,000円
- 問合せ：☎ 044-988-2031 (本間^{ほんま})
 E-mail: tizm2008@jcom.home.ne.jp (和泉^{いずみ})

全員集合！！

第17回 町田発国際ボランティア祭 2014 夢広場

～ この星に平和と希望を ～

11月3日(祝) 10:00～16:00 於:まちなかの駅「ぽっぽ町田」イベント広場
国際支援と友好活動をしている団体が集結の、エスニック気分溢れるお縁日です。今年の目標は

雲南昭通市魯甸県大地震

被災地の子供達の、教育分野への温かな復興支援!



'わんりい' は、今年は美味しい中国茶とラオスの少数民族・モン族の女性たちが丁寧に刺繍を施したポーチやバッグなどの刺繍小物を販売します。尚、夢広場実行委員会が「世界の味を味わおう! シリーズ・その2「夢広場ランチ」(クスクス/エスニック風味の温サラダ/スリランカのココロケ/ネパールのマサラ・ティ)(500円50食限定)で販売します。 ▶ 問合せ: ☎042-722-4260 町田国際交流センター

●主催: 2012 夢広場実行委員会 ●共催: (財)町田市文化・国際交流財団

◆わんりいの催し

'わんりい'の秋の恒例の催し、手づくり月餅の会

月餅3種類(小豆、ナッツ、ココナッツ)をご一緒に作って頂きましょう! お土産付きです。

年々、研究を積んで美味しくなる月餅です。是非、焼き立ての香ばしい月餅のご賞味を!

- 場所: まちだ中央公民館 6F・調理実習室 東京都町田市原町田6-8-1
- 月日: 2013年11月11日(月) ● 時間: 12:30～15:30
- 会費: 1500円(会場費・材料代など *お土産付き) ● 定員: 先着15名
- ◆ 申込み: ☎050-1531-8622(わんりい) E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp



初心者のための水墨画教室

〈鶴川水墨画教室〉体験のお誘い

初心者のための水墨画教室です。生徒のレベルと個性に応じた適切な指導を体験してみませんか。

- 講師: 満柏(会長)
- 場所: 鶴川市民センター(駐車場有)
〒195-0062 東京都町田市大蔵町1981-4
- 曜日・時間: 毎月第2、第4(月)午後2:00～4:00
- 体験参加費: 1000円
見学: 無料
- 問合せ: 野島
☎042-735-6135



'わんりい' 197号の主な目次

北京雑感(88)三虎橋路	2
諺・慣用句(33)身の毛がよだつ	3
媛媛讲故事(67)和氏璧 ^{かしへき} の伝説	4
城市めぐり(36)蘇州市 I	6
中国の笑い話 19	9
詩人尹世霖 ^{いんせりん} の童詩の世界⑥	10
日本探検記(16)再び秋祭	11
中国の変身(1992年～)	12
我が故郷・瀋陽への想い	14
'わんりい' 活動報告「バルト3国を旅して」	16
スリランカ(81)象の孤児院 II	18
新刊紹介「ある華僑の戦後日中関係史」	20
'わんりい' 掲示板	21・22

【2014年10月の定例会とおたより発送日】

- ◆ 定例会: 10月14日(火)
三輪センター第3会議室 13:30～
- ◆ 11月号のおたより発行日:
10月31日(金)
三輪センター第3会議室 10:30～
※お弁当を持参下さい。

*「ボイストレ」と「漢詩の会」の案内は19ページに掲載しました。